

「オミクロン株」は誰にとっても単なる「かぜウイルス」か？

札幌市医師会
市立札幌病院

かたおか ひろし
片岡 浩

Coronavirus disease

2019 (COVID-19) は新型コロナウイルスの SARS-CoV-2 による感染症である。依然として世界的な流行が持続しており、2022年5月現在、世界で5億人以上が感染し、600万人以上の方々が亡くなっている(1)。現在流行中のオミクロン株は、潜伏期間が、これまでの流行株と比較しより短く(中央値2.9日)、感染性および伝播性が高い一方で、デルタ株と比較し上気道で増殖しやすい特性があり、感冒様症状を呈し、高用量酸素投与や人工呼吸管理を要する重症例は少ないとされている(2、3)。3回目のmRNAワクチン接種による入院抑制効果はデルタ株と同等の86%と報告されており(4)、これもオミクロン株流行下におけるCOVID-19の重症化抑制に寄与していると考えられる。一方で、飛沫感染を抑制するため、感染管理の一環として、マスク・手洗いの徹底を行うとともに、在宅ワークの励行や飲食を伴う多人数の会合の制限、スポーツ観戦やコンサート会場での歓声自粛が引き続き求められ、一般市民の日常生活様式が余儀なく変更させられることとなっている。

昨今の本邦および海外報道等を見る限り、伝播性が高い一方で重症化率が低いことより、SARS-CoV-2ウイルスのオミクロン株は、弱毒化した「かぜウイルス」との認識が広がっているように思われる。一方で、従来株同様、高齢者、ワクチン未接種、有基礎疾患症例における重症化、死亡リスクが指摘されている(3)。

市立札幌病院は2022年5月時点で、1,700名を超えるCOVID-19患者に対応してきた。オミクロン株流行期にあつては、当院呼吸器内科、感染症内科とわれわれリウマチ・免疫内科が分担して治療に当たってきた。

2022年1月から3月の2ヵ月間において、当科が担当したCOVID-19患者は32名(男性15名、女性17名)で、平均年齢は78.9歳、ワクチン未接種者が18.8%であった。基礎疾患としては、糖尿病が31.3%、精神疾患や認知機能障害28.1%、高血圧25%、脳血管疾患18.8%、透析を要する末期腎不全12.5%、呼吸器疾患6.3%、非アルコール性脂肪肝が3.1%であった。

酸素投与は25%に施行され、高用量酸素療法(オキシマスク、リザーバマスク、高用量経鼻酸素療法)使用患者は15.6%であった。誤嚥性肺炎の合併が40.6%に見られ、特に施設クラスター患者の多くは誤嚥性肺炎を合併し、抗菌化学療法を必要とした。

死亡例は6.25%で、いずれもワクチン2回接種者であったものの、S蛋白に対する抗体が誘導されていない例と高齢で誤嚥性肺炎の合併例であった。

ワクチン未接種者に死亡例はなかったが、全例に抗体カクテル療法を施行するとともに、半数でバリシチニブ、レムデシビル、トシリズマブの併用を行った。これにより回復したものの、進行子宮頸癌患者では、広範な器質化病変が残存することとなった。

デルタ株流行時期では、半数の透析患者が死亡に至ったが、オミクロン株流行期にあつては、ワクチン未接種例1例を含み死亡者はなかった。

当院に入院となるCOVID-19は、合併症があるか中等症以上の方々が選別されているとはいえ、われわれのデータが示すところは、ワクチン未接種、有基礎疾患、高齢の条件下では、たとえオミクロン株であっても呼吸不全を呈する例が少なからず生じるということである。元来健康である方々がオミクロン株に感染しても「かぜ程度」の臨床経過をたどるであろうが、これが重症化リスクを有する方に伝播した場合には、重症となり得る呼吸器感染症を惹起することになり、単に「風邪がうつった」では済まされないのではないだろうか。

全ての人々が一様に行動制限をかけられるような過剰な蔓延防止策は不要であろうが、これまでの経験の積み重ねから、適切なマスク装着と手指衛生、適度な換気により感染リスクを低減できることが判明している現在において、習慣化した感染対策を行いつつ、以前の生活様式を取り戻すことは十分可能と考える。コロナはもはやかぜのひとつになったとの観点から、敢えて感染対策を中止あるいは簡素化することについては、今一度その行動様式に対して科学的見地からリスク評価を試みる必要があるのではないだろうか。

<参考>

1. World Health Organization Coronavirus (COVID-19) Dashboard (<https://covid19.who.int/>)
2. 新型コロナウイルス感染症診療の手引き第7.1版
3. 国立感染症研究所 SARS-CoV-2の変異株 B.1.1.529系統(オミクロン株)について(第9報)
4. Lauring AS, et al. BMJ 2022 376:e069761